

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「…的」と「ポストモダン」など

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大岡, 信 メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2001

「…的」と「ポストモダン」など

大岡 信

「…的」という言葉を、まさに目の敵にして日本語の文章から追放したいと念じた人は、谷崎潤一郎をはじめ、近代の文人にはきっと何人もいたと思う。

私も「…的」をできるだけ使いたくないけれども、止むを得ず、それも時には頻りに使って文章を書くことがある。使うたびに後ろめたい気がするのは、「…的」という語は、まさにそれ自身が自認しているように、近似値を表現しているにすぎないからである。道徳的、暴力的、懐疑的、意識的、無意識的、政治的、文学的、観念的、感覚的、論理的、衛生的、効果的、致命的等々。

どの語をとっても、怪しげな曖昧さを引きずっている。これを使わずに文章を書くことができたらどれほど精神の衛生にいいだろうと思うのだが、他面、便利であること、またむしろ曖昧な部分があった方がよいことだっているいろいろあること、その他その他の理由によって、「…的」は決してなくならないだろうと思われる。

私は「折々のうた」という短詩形文学鑑賞の新聞コラムを19年間ほど前から朝日新聞に連載してきた。時々休暇をとるので、現在実質では丸14年間になるが、その間、新聞紙上で180字、岩波新書版では210字以内で書かねばならないという制限があるため、おのずから自分で掬のようなものを作って実行してきた点がいろいろある。そのひとつは、何百万人の読者が想定される以上、中学校を卒業しただけで社会に出た中年以上の生活者にも、さほど苦痛ではなく走り読み位はしてもらえる文章を書くよう心掛ける、ということだった。

すぐにわかって頂けるであろうように、このような水準を設けるなら、「…的」が駄目なことは歴然としている。「折々のうた」では、私はとりわけ「…的」を使わないようにしている。もちろん、厳密には守れない。たとえば「端的に」のたぐい。これを使うのは、この語が、観念よりは感覚を、特に音の面で簡潔に伝えてくれる語だと感じるからである。それにこれは「道徳的、暴力的」以下さきに拾ってみた「…的」の語の場合とでは、語の働きの性質に違いがある。

むろん私は他にいくつも、「論理的」とか「文学的」とかの形容語をこのコラムで使っていると思うが、ただ、この場合でも、自分が今あのいやな「…的」を使っている、ということは必ず念頭に置いて書いているはずである。「はずである」とは何ともいい加減だが、そう断わる必要があるほど、「…的」は私たちの生活の中に無意識裡にしみ込んでいる。

私がこのコラムの掬としていることの別の一つは、タバコとかカステラとか郵便ポストとかの、明確な物体を指し示す、いわば第一次素材の外来語を除いて、たとえばポストモダンとかニヒリズムとか、センチメンタルとかイデオロギーとか、総じて語義が使用者個々の間で勝手に揺れ動いている可能性のある膨大な第二次外来語は、使うまいということである。使いたい誘惑を感じても、これは軽蔑すべきごまかしだぞ、と自らに禁じて、わかり易い漢語で表すか、文章全体を考え直す。もっとも対象作の作者の方で使っている場合は、その限りではない。

「…的」「ポストモダン」も、あの短いコラムにはあまり馴染まない。そしてこれらの語は、曲をつけて歌われることにも馴染まない。言葉と感情との間に隙間風が吹くから。